

〔史料紹介〕 「三くじ百番 板下」

—大阪商業大学商業史博物館佐古慶三教授収集文書「百籤」について—

岡村良子

はじめに

初詣に参詣する人々がおみくじを引き一年の吉凶を占う姿は、現在も当たり前のように見かける光景であり、神社の境内のご神木にはたくさんのおみくじが結ばれている。六角の箱から番号の書かれた棒を一本引き出し、その番号に該当する札紙に書かれた内容に一喜一憂する。こうしたおみくじは江戸時代以前からおこなわれていたが、札紙を番号順に収録した「御籤本」と称される書物も刊行されて流布していた。しかし、これらは札紙が先にあつてそれを書物としてまとめたのではなく、「御籤本におさめられた各番号の言わば独立したものが札紙になったと考えられる」のである。

ここで紹介する「百籤」はそうした御籤本の一種である。まず書誌的なことから紹介していく。

解題

底本 大阪商業大学商業史博物館佐古慶三教授収集文書
巻数 二巻二冊
書型 半紙本。袋綴じ。縦二四・〇糎×横一六・七糎。
表紙 原表紙。緑灰色。

題簽 あり。褐色に変色してタイトル読めず。

内題 第一巻「百籤 五十番」第二巻「百籤之続 五十兮百迄」(いづれも手書き)

序題 なし。

匡郭 縦二〇・六糎×一四・二糎(印刷)。四周单边。

柱刻 第一巻、第二巻とも上部柱題はいずれも「万年大雑書」(印刷)、下部に、〇は印刷、丁数は手書き。第一巻、初丁「〇二」、第二丁「〇二」、第三丁「〇四」、第四丁～第二五丁は、「〇五～〇二六」。第二巻 初丁「〇五十二」とあるのを「〇二十七」と貼紙訂正、第二丁「〇五十四」を「〇二十八」に貼紙訂正。第三丁「〇五十四」を「〇二十九」に貼紙訂正。第四丁から第二五丁は「〇二十七～〇五十一」。

丁数 第一巻二五丁、第二巻二五丁。

刊記 なし

第一巻の見返しに「ミくじ百番 板下」とあることからわかるように、本書は匡郭、柱刻の書名以外は、手書きの本である。板下の紙が薄いので補強のために間紙がはいつているが、それは製本後に入れられたのではなく、一枚を二つ折りして丁のウラとオモテの両方を補強しており、本紙とともに綴じられている。板下を綴じたものということであれば、実際にここに綴じられた板下は刊行されていない可能性は大きい。

また柱題に「万年大雑書」とあることから、「万年大雑書」を刊行した版元で作成された可能性がある。それには現存の「万年大雑書」と比較したうえで、その可能性を探る必要があるだろう。まず、江戸時代以降多数刊行された「百籤」関係本との比較の上で本書の特徴を考察することとするが、その前に簡単に研究史についてふれておきたい。

「元三大師御籤本」研究史

おみくじは、現在では占いの当事者が、筒箱にいれられた竹の棒を箱を振って一本穴から取り出し、その棒に記された番号で占いの内容が書かれた札紙と引き換えるという形式がなじみ深い。しかし延暦寺横川元三大師堂のおみくじでは、参拝者が占ってもらいたい旨を告げると僧が祈念をこらし籤をひき、その解説は僧の口から伝えられるというものである⁽³⁾。この堂は江戸時代に出版された「御籤(鬮)本」に名を冠された元三大師(良源)の住居跡といわれており、俗に元三大師こそが日本におけるおみくじの創始者といわれてきた。現在ではこの元三大師御籤は大師が作ったのではなく、そのルーツが、中国では南宋後期にはその存在が確認される「天竺靈籤」にあることは、酒井忠夫氏によって明らかにされている。また、それが元三大師作であるとされてきたことに関しては、江戸時代初期の天海による元三大師信仰の宣揚と深くかかわっていたことが、宇津純氏により指摘された。

そして、また、中村公一氏の指摘では、「天竺靈籤」は、天台寺に残る観音籤筒から、室町時代の応永十六年（一四〇九）には既に伝来していたこと、「天竺靈籤」が現存する各寺へ伝播した経緯と由来が紹介されている。

国文学の分野では、前田金五郎著『好色一代男全釈・上巻』「観音籤」の注解で、寛文二年跋の『天竺靈感観音頌』そのほか類書が紹介されたことを嚆矢とし、その後、前田氏蔵本『元三大師百籤』と『観音百籤占決諺解』が影印本『近世文学資料類従・参考文献編十一』に野田千平氏の解題とともに収められている。その後、二〇〇一年、二又淳氏が江戸時代に刊行された現存元三大師御籤本を網羅した「元三大師御籤本一覽稿」を発表した。その他、おみくじに関する全般的な研究書であり、観音籤の訳注を掲載した中村公一著『一番大吉！—おみくじのフォークロア』、江戸時代の占いを紹介する中で元三大師御籤に二章を割いた大野出著『江戸の占い』が刊行され、氏の一連の研究がまとめられ、元三大師御籤に含まれる思想が明らかにされている。このように元三大師御籤本についての研究は、現在書誌学的に押さえられ、今後内容に関する研究が深まると考えられる。こうした背景を踏まえ、大野氏が分類された方法を参考に、当博物館蔵「百籤」の内容について考察していきたい。

「御籤本」の分類

御籤本は、主にくじ番号、その吉凶、五言絶句（詩句）、和歌、注解、挿絵からなるが、貞享元年刊の「元三大師百籤」では、前述のうち注解と挿絵がなく、「観音百籤占決諺解」では、注解の他、「失物」「待人」などの事項（事象別判断）⁶がつけくわえられ、その後の現在にまで続く「おみくじ」の形式がすでに見て取れる。この本では、職業別の吉凶（職分別判断）を詳細に語り、一番につき一丁のオモテウラを割いているが、これはこの後の御籤本では継承されなかった。大野氏は、思想史研究上の興味から、注解の違いに着目して、御籤本の発展に二度の変移があり、その変移に即して三つの系統にわけ、「観音百籤占決諺解（貞享四（一六八七）年刊）」（以下「観音籤」）をA群、「元三大師御籤諸鈔」（文化六（一八〇六）年刊）と明治以降のこれを継承する本をB群、後の「天保選書永代大雑書万歴大成」まで連なる「元三大師御籤絵鈔」（嘉永六（一八五三）年刊）をC群と位置づける。A群では、注解の中で「天道」「観音」「日待ち」など願望をかなえるために信仰すべき対象があげられる。B・C群では、倫理性の強い処世訓が説かれる。この傾向はBよりC群が大きくなっている。⁸C群では籤の吉凶で無条件に願望の実現・欲望の充足が遂げられるのではなく、心の正邪、行いの善悪に左右され、倫理的行為の如何によつては、吉凶が全く逆の方向にも転換してしまう、もしくはさせることができるといふ、応報の条件としての倫理的処世訓が説かれ、しかしそれを説く主体が観音や神仏であると分類している。⁹

この分類で行くと、「百籤」はC群ということになるだろう。大野氏が分類したような倫理的処世訓ばかりが強調されているのではなく、形式的にはくじ番号、その吉凶、詩句、和歌、注解部分に総括と信仰対象、事象別判断と揃い、従来の御籤本を継承して信仰の対象も記されている。御籤の成り立ちから考えると、信仰部分は簡単に切り捨てられる類のものではないということだろうか。しかし、百番すべてに具体的に何を信仰すべきかが記されている場合は少なく、すぐるべき対象として「天道」「月待ち」「日待ち」「神明」「八幡」「観音」「大般若心経」「庚申待ち」「仏心」があるが、単に「神仏を祈る」「神仏を仰ぐ」など対象は曖昧である場合が多い。¹⁰⁾

「百籤」の特徴

次に「百籤」の注解とはどのような内容であるかを、C群「天保選書永代大雑書万歴大成」と、適宜A群「観音籤」との比較も交え、紹介していく。A群であった職分別吉凶だが、「百籤」では職分別事象は記されていない。しかし、もちろん身分は意識されており、同じ大吉でも注解で差がある。

第八十六番大吉

此みくし八侍分出家学者など八こと（合字）に大吉なり平人に八

あまり吉すぎてかへつてくらぬまけあるべし万事ひかへめにし、何年にもつゝしへりくだりて慢心なく八家業はんしやうし財宝おのづから集るべしつしまざれば災来¹¹⁾

他にも、身分が意識された例は、十三番「町人百姓にはあまり大吉すぎて位負け」、六十二番「凡人にはあまり良すぎて」がある。その場合は、「官途又は家業など人の妨げありて運開き難しに」など、官途を求める出家・侍・学者と、家業での成功を求める町人・百姓もしくは、「尋常の人」「平人」「凡人」とに分けられている。前者が、同じく第八十番大吉で「侍分または学者出家など」は「多年修行の功あらわれ貫禄伴うなり」と修行が報われる。一方で、「運氣開けず病人うち続き、心配苦勞絶えず、商いすれば損をなし、その損失を入れ合わせさんとして却つて又損をなし、心苦いよいよ重なるがゆえ、憂さを忘れんがため酒を飲み、ついに不実なることとして身の立ち難きに到る（第十七番凶）」と不幸は商人の身の上に仮託して語られる。

これに対して「観音籤」の記述は、信仰が主であり、それ以外には職分別の心がけがあるのみで、幸不幸はさまざまな職業の人々が本来的に持つものの範囲内だといえる。例えば後家や比丘尼であれば「身持ち大事なり、大いに名をたてられ憂き目にあつべし」であり、手代や人の子には堪忍や慎みを説くといったようである。「天の恵みを得て身に心がけさへよくばついのほどは災難事のがるべし」「心正直に神仏を信じたらば心がけによりのがれつべし」とあるように、心が

けは信仰が主で、C群のように儒教的倫理観にまで昇華したものでない。否定的な心理状態としては「ひが事」とある程度である。それに対して、「百籤」の倫理的処世訓は特にC群の範囲をはずれることはないのだが、特徴的なのはむしろ以下のように描写される不幸のありさまである。

願い事に妨げ多く思い立っても成就成りがたし(第三番凶)

芸術に様々苦勞すれども人に用いられず心中憂い悲しむ

(第十四番末吉)

いろいろの心遣いをなし苦勞せしこと一つも功なかりし

(第五十三番吉)

身と心さえ思つようになりがたく(第五十四番凶)

このように思い悩む「心理」がさまざまに描かれる。御籤に我が心が映るのを見て、人は御籤への畏敬の念を抱くことになるという、これは一つの仕掛けであろう。とはいえ、「ここには」とかく思つこと叶い難くおのづからいろいろ心迷いて行くとも帰るとも定まら(第五十九番凶)「ないから御籤を引き、我が身の吉凶を占つ。神仏や倫理的処世訓に従って行く他すはないとはいえ、身過ぎ世過ぎに心をすり減らす、今と変わらない人の姿、閉塞した時代のようすを見ることのできるように思つ」。

しかし、これは町人、百姓のみのことではない。侍、学者等の身にも憂さがないというわけではない。第四番吉では「忠義あれども時到達ず」、修行が身の出世に関わる立場であつても、

芸術にさまざま苦勞すれども、人に用いられず心中憂い悲しむ

(第十四末吉)

人の妨げ(第二十二番吉)

目上の人に意地悪き人ありて出世をも妨げられ

(第十九番末小吉)

など対人での苦勞がある。「我が才智を以て世に交わらんとすれば却つて世間より憎みをうけ禍を生ずる」(第四十六番凶) こともある。

では、それに対して、「百籤」ではどう対処すべきだと説かれているか。第四番では、武士ならば立身出世するが、町家、百姓であれば、「身を働き時節を待つ」こと、それぞれ吉ではあつても、「身を正しくして信心すべし」(第十四番末吉)「身の行いを正して神仏を祈る」(第二十二番吉)「神仏に祈誓して身を慎み、堪忍を専らにする」(第十九番末小吉)「時節の来るのを待ち慎むべし、強いて事をなさんとすれば災いあり」(第四十六番凶)と、身を慎んでじつと雌伏し時を待つことが推奨されている。しかしそうして待った好機である大吉は、前述したようにオールマイティが約束されたものではなく、「万

事に心正しくしばらくも忠孝の心をゆるめず正路にして時の至るを待ち「尋常の人はいささかのことに心を動かすが故大いなる立身出来がたくよく慎むべし」(第七十八番)というものである。

また、他の番号に比べて格段に明るい結果を提示する第八十五番大吉の籤であつても、「幸いを得るたびに猶々つつしみ正路なれば、大器は遅くなることわざの如く諸事の望みなることの遅くといえどもさんざんに出世して」とあるので、御籤を引いたものは「さんざんに出世」するためには、「つつしみ正路」して時を待たなければならぬ。

商人の願いは、商売が繁盛し「福有の身となりのち安楽となる」(第四番吉)ことだろう。そのために「よるずに慎み正路」(第八十一小吉)であることがまず求められる。宮本又次は「大阪町人の社会意識」の中で、西鶴の「日本永代蔵」からの引用とともに、商人の「才覚」を、利発・発明・工夫・利動であり、商機をみて思惑し、資本を効果的に動かす才能と決断力として、商人に必要とされる「始末」「算用」とともに積極面として評価しているが、利を求めぬあまり不正につながり、商業的道德「正路」が求められる事を下記のように指摘している。

仕合わせという偶然が支配する以上、永い目で見ると商人とても実直にして正路の行いをして冥々なる加護をまつほかはないであらう。

ここでいう「分限は偶然が支配する」という考えの元となる「日本永代蔵」からの引用は以下の通りである。

分限は、才覚に仕合手伝では、成がたし、随分かしこき人の貧なるに、愚かなる人の富貴、此有無の二つは三面の大黒殿の、まゝにもならず。鞍馬の多聞天の、をしへに任せ、百足のごとく、身の働で、其上に身代のならぬ、是非もなし。

もつとも永代蔵が説く「分限者のなり始め」は、しかし「正路」という倫理的尺度からするとどうかと思われるものがなくもない。巻五では、二年掛けて唐人から金平糖の作り方を聞き出し、千貫目持となる商人が登場するが、分限者にその成り立ちを語らせると、「その種なくて長者になれるは、独りもなかりき」という「分限の種」は、「さる大名の厄落としの金子を拾つた」こと、他の世渡りの賢い例でも、祭礼用の衣装の貸し出し、三十貫のへそくりを持った後家を見つけるなどである。また、「唐物の買置」で、「優れて相場の安きもの」で「歳重ねても損ぜぬ物を買置で、利を得ぬ事なし」とは書くが、龍の子が後年高値で売れようと十年もおいて気を遣つのと同じ、火喰鳥の卵を孵しても炭を喰うことは疑いなく、いくら珍しいといつてもこんな買い置きは「国土の費」と皮肉るように、そうそう簡単な儲け口はないのである。

このように「仕合」という偶然は支配しがたいものとしてある。「百籤」では現状に苦しむ心理描写が身に迫り、その偶然をどうにかして身に引きつけようとする意志がよけいに感じられるのである。世俗的な成功への願望が強いが故に、より心理的に追いつめられた状態として描写されているように思われるのである。

もちろん「百籤」は、小説ではないので「才覚」が具体的に提示されるわけではない。才覚をこらすのはあくまでも個人の能力であり、御籤の及ぶところではない。御籤はわずかに運の有無、というより時節を待つことを説くのみで、今が好機であるのかどうかは、やはり個人の判断である。籤の結果が大吉だからといって、「くじを待みて慢心あらば却つて幸い災いなる（第八十番大吉）」のであり、凶であれば「及ばぬ望みをやめて一心に家業を出精（第八十三番凶）」するところが説かれる。また「今までの業を変えて新規の業をなしてだんだん繁盛する」という結果の籤は大吉三十五あるなかでもたった一つきりであり、「永代蔵」が語る如く、「身に応じたる商売をおろそかにせじ」ことのみである。その点では、身の分限を知るといふ商人の道は変わらないのである。「永代蔵」で、分銅屋があちこちの商いを見た上で「独りも、見過をかへたるは見えず。貧者ひんにて、分限は分限になりける。是程ふしぎなる事なし」と語るが、貞享五年という「観音籤」刊行に一年遅れるその商人観は、それよりおそらく時代が下るであろう「百籤」でも変わることはない。

しかし、実は「分限者」は単なる金持ちとは異なるのである。西川

如見は「町人囊」巻五（享保四年）¹⁶で、以下のように指摘する。

分限者と金持ちは同じからず。分限とは分の限りと書て、おのれが身の一分相應限りの有所を知て。身の分限にしたがひ相應のふるまひをして、過分の貯へを求めず、身を静かにし心を安樂にし、日をくらす人を分限者とはいふ也。金持ちは一生に身を安くすることを不（返り点）知、金銀を弥が上に集る事を樂みと思ひて、心のうち静かなるいとまもなく、飽足ことをしらず、是を金持といへり。¹⁷

「金持ち」を目指すから「身を安く」することを知らないのだから、目指すべきは分限者なのである。また、「町人囊」では、町人はこう書かれている。

聖人の御詞は、貴賤上下にわたりて、いづれの書いづれの語にて、人の教誡とならざる事なし。四民みな通用の道理あり。去ながら其さしあたりたる所は、皆多は学者君子のうへ、又庶人より上にある人の教にして、町人・百姓にさしあたりたる教すくなし。町人・百姓は人におさめらるゝものなれば、上たる人さへ心正しく身おさまる時は、庶人おのづから其風俗にならひて、天下平かなる理なれば、民をばよろしむべし、知らしむべからずとて、分て庶人への教くはしからぬもの也。但孝経に、天の時を用

ひ地の利に因て、身を謹み用を節して、父母を養ふは庶人の孝なり、と聖人の仰置れたるこそ、さしあたりて町人・職人といへ共、天の時、地の利を考へずんば有べからず。用を節して身を謹む事は、四民ともに第一成誠也。取分町人は用を節することさしあたり肝要なる事也。町人の身を亡し人を悩す事の悪事、皆此用を節することより始めり。「巻五」⁽¹⁸⁾

このような「町人囊」の分限者と金持ちの違いに見る商人の倫理観が、「天保選書永代大雑書万歴大成」⁽¹⁹⁾に収載された「元三大師御蘭鈔」(以下「永代・御蘭鈔」)には、見てとることができる。ここでは、金持ちを目指すことによって生じる精神状態に描写が費やされることはなく、むしろ以下のような心の持ちようを示唆する。

身の分限を知り、不義の富貴を望まず、身の五常の道を行い天明を樂しむ君子の心なり、およびぬのぞみをおこさず、善事は少しにても行い悪事は少しにても行わず、人の富貴をうらやまず身の貧窮をも悲しまず。かく気樂に日を送る工夫すべし

(第七十六番吉)

では、現世での利益を求める人々に「百籤」が差し出しているものとは何だろうか。「町人囊」に孝経の説く如く「天の時、地の利を考へずんば有べからず」とあるように、「百籤」でも、時節を見ること

が求められている。ただし、ようやく得られた時節、好機はまだ、幸いを得るための十分条件ではない。

「おのずから人の愛憐にて望みも叶う」(第七十四番凶)「貴人、目上の人の引き立てありて大なる幸いある」(第九十番大吉)。これは、侍、出家、学者であつても同じで「目上の人の引立てがあつて官禄十分なる」(第二十五番吉)。

つまり「百籤」では、「運」の端緒は「人に用いられる」ことと結びついているのである。学者や出家などは「よき師にあいてその身の徳もあらわる」(第二十二番吉)であるし、「主人、親、師匠、高貴のお方の恵みにより望事かない立身」(第四十五吉)する。また「心根違いで上たる人に憎まれ」ても慎み深く神仏に信心し、とかく慎み第一であれば「親類のうちより助くる人」があらわれ「申し開き安心なす」(第五十二凶)のである。

「万事こころのままになりがたくして苦勞殊に多く、そのうえ妻子または縁者とも朋輩と心があわざるもの争い絶えず、頼り相談相手が却つて災いを引き出すこと」もある。ここでは、神仏に常に祈念することが処世として説かれるが、第四十末吉では、「人にだまされて損失又は災い」にあつても、「わがために毒となる人と薬になる人」を見極めて、「考えて良き人の意見にしたがへば、これを救おうと世話する人あり、繁盛すると説かれる。

このようにみていくと、金持ちになるといつ分限を超えた望みに汲々とする以上に神経をすり減らすのはやはり人間関係だろう。その

ことは例えば、第三十九番凶に表れている。この籤は、「観音籤」では凶の中でも格段に結果がよくない籤であり、そうであるだけに、他の御籤本との比較の上で興味深い。

「観音籤」では、元々の詩句の「由損断頭財」を「さらし首」もしくは「斬首」と解し、職分別に分けられる注解の中では、「侍であれ、出家であれ死罪に合うことあり、女人であれば心狂乱の病出て、首くくり淵川に身を投げて死することあり」とあり、人の子弟子手代家の子も火事に遭い盗人にあう、憂いにあい、悪事言いかげられ綱にかかり恥辱をさらし首を斬られるなど、非常に悪い。町人、商人、職人、儒者、医者、山伏、禰直、芸者、巫女も同じ結果である。

「百籤」では、そこまでひどい内容ではなく、「運氣大いに悪しく望事叶い難し」とあるものの、火事が注意される元の和訓を「我が頼みに思う人の心変わりせしをわがうちより火の出たにたとへるなり」と解し、何れも大事なれば「ただ、何事も望まず心ただしうして神仏に祈誓してよし」となっている。

「永代・御鬮鈔」では、もう少し結果は深刻で、「腹心の下人あるひは友達も心変わりするくらいの不仕合にてあしき事度重なる運なり」と、「百籤」と同じく、親しい人の心変わりが指摘されている。不仕合がその心変わりに限定されており、「それくらいの不仕合せ」で、その他あり得べき不運として、「火災」「盗難」「身代保ち難きほどの損失」があげられているのである。その意味ではもとの詩句の内容をくみとった注解となっている。

この点から見れば、「百籤」の注解はもとの五言の詩句の内容から逸脱しており、吉を凶に変えないように、凶を吉に変えるためにかくあるべしと説くことが主となり、それぞれの籤にある吉凶の内容の違いがあいまいになってしまっている。これは、天竺靈籤から継承されている元々の詩句の内容を注解では正確に反映していないことにも関係しているであろう。「観音籤」の序文にはすでに、漢詩の一行目は生年から十五まで、第二句を十六から三十歳までと十五歳毎の吉凶を読み取れるとして、また、第一句から第四句までを四季に対応させ一年の吉凶を占うという見方を示しており、「永代・御鬮鈔」でも同様の文句が見える。つまり本来の詩句で一つの語句が示す吉凶の意味から逸脱してしまっているのである。

しかし、ここで「百籤」「永代・御鬮鈔」の二つながらに共通するのは「人のつながり」と運命との関係である。「友達や親しい人の心変わりは、「火災」や「盗難」、「身代を保ちがたき程の損失」と同等の凶事なのである。

挿絵の比較

ここで少し視点を変えて、挿絵に注目してみたい。「百籤」の特徴として画想の豊富さがあげられる。もちろん手書きなので絵が細かく描かれているということもあるだろう。しかしそのことを抜きにしても絵を見ているだけで興味を覚えるものがある。²⁰⁾例えば、「百籤」で

は登場人物は多岐にわたる。中国の武將、占星術師、石川五右衛門、大星由良助、韓信、太公望、海女、琵琶法師など。また、人物以外に自然、動物（豹、鶴、鷹など）、職分としては、武士や出家、学者、商人以外に囃子方、門付、公家なども見られ、それぞれに細かい趣向がみられる。

「永代・御鬪鈔」にはそこまで趣向をこらした絵はみあたらない。同じような画が散見でき、挿絵に神経が行き届いているとはいいがたい。また、登場するのは主に商人である。たとえば、第四十四番は詩句で暮がたとえにあげられているため、「百籤」「永代・御鬪鈔」ともに暮盤を前に暮に興ずる人が描かれる。「百籤」では侍と出家で描かれているところが、「永代・御鬪鈔」では、商人の姿になっている。その点で、大野氏が指摘していたように、御籤本の受容者の変化がここにも読み取れる。²⁾

他にも、第六十七番凶では人が川を眺める姿がどちらにも描かれているが、「百籤」は武士、「永代・御鬪鈔」では商人となっている。第八十一番では、財宝を前にする男女が「百籤」では商人、「永代・御鬪鈔」では武士になっているという逆の例もある。しかし、挿絵内の総登場人物中の商人が登場する割合からすると、「百籤」では一四七人中四一人、「永代・御鬪鈔」では一六三人中八〇人となっている。

「百籤」の挿絵の題材が多岐にわたるのに対して、永代・御鬪鈔の挿絵は同じような絵が多いが、逆に言つとわかりやすい。たとえば、人に頭を下げている絵は「百籤」では六。そのうちの大吉の五つは、

絵の意味としては、人に認められて出世している姿が描かれたものと考えていいだろう。永代・御鬪鈔ではこれが、一七を数え、そのうち一二が吉以上。他に大吉を表す絵は、「えらくなつて従者を連れていく姿」を表している絵と読み取れるのだが、「百籤」が二なのに対して、「永代・御鬪鈔」では五つを数える。酒席を描く絵は女難や遊びにふけることを誡める絵が、「百籤」ではキセルを持った商人が酒席で女性に給仕されている絵なのに対して、「永代・御鬪鈔」では「河内屋」と描かれた店先に立つ男の挿絵があり、その点でどう読み取るべきか一見してわかりにくい。似た絵は五つあり、どれも吉以上の挿絵である。そのことから、出世して出仕する姿を描いているものと読み取れるのである。「百籤」では、大吉の挿絵として「富士山と帆掛け船」「天に昇る龍」「鶴」「桜」などを描くのに対して、同じ趣向の絵が多い。その分、類型化されていてわかりやすいともいえる。「百籤」の注解に心に関する描写が多い分、挿絵にはそれを表した人物を描くことが少ないのに対して、「永代・御鬪鈔」では、ほとんどが人物の姿ばかりでその様子も類型化している点が指摘できる。

柱刻について

「百籤」の特徴をあげるために、結果として「永代・御鬪鈔」との比較に多く筆を費やしてきたのだが、そこには、柱刻の問題を解かう

えでのヒントがあるのではないかと考えたからである。

寛永八年（一六三一）の刊行から、明治に至るまで様々な種類の「大雑書」が刊行されている。しかし、御籤本は最初から大雑書に含まれていたわけではなく、現在確認できるものでは、この「永代大雑書」で初めて収録されたものを見ることができるのである。⁽²³⁾

「百籤」の柱刻にある「万年大雑書」については、川崎理恵氏による「大雑書に関する書誌的考察―貞享から宝永期まで―」⁽²⁴⁾を参考にしたい。それによると、「万年大雑書」という書名は目録題から採用されており、題籤は「万年鑑 首書多入 三世相」大雑書拾遺大成」で、本は四冊あるが、いずれも出版年は「元禄十一戌寅年孟夏吉辰」で、版元は秋田屋徳右衛門、敦賀屋九兵衛、山本弥三兵衛・岡野安兵衛と版元不明のものである。東海学園大学所蔵の秋田屋徳右衛門板が最も刷り具合が美しく、それを参考にすると、項目番号は「百十五」と「六十図の事』『○しほ時の事』『○日出入の事』『○月出入事』『○日の長みしかの事』とある。これらの版元の中でも敦賀屋九兵衛については、橋本萬平氏は、『寛政九年版大ざっしょ』⁽²⁵⁾の解説で以下のように指摘している。

売れる本と見て「大雑書」は、多くの出版店が様々の趣向をこらして発行しているが、この本に執念を燃やし、江戸期を通じて常に新機軸を考案し、改正増補した新版を発刊したのが、大坂の書肆敦賀屋九兵衛である。⁽²⁶⁾

また、

敦賀屋九兵衛は詳細膨大な『大雑書』を何回も出版し、それらが屢々再版されて世間の需要を満たしてきた。然し、彼はどうしても既刊の『大雑書』では満足出来なかった。あらゆる事項を探り入れ、庶民の日常生活に必要な知識すべてを盛り込んだ『大雑書』を作ろうと決心をした。それはいつ頃であり、それに参加した学者が誰であったか全くわからない。然しこれだけのものを作り上げるには、驚くほどの組織と時間とが必要であったにちがいない。⁽²⁷⁾

とも、指摘している。

敦賀屋が天保十三年によく出版したのが、「天保新選永代大雑書萬歴大成」である。序文執筆年が天保九年、出版が十三年。その丸四年の間に御籤本を収録すべく執筆されたのではないかと。結局それに収録されたのは「元三大師御鬮絵鈔」であった。「百籤」に何かその間の事情をつめるようなものがないかを探るべく、内容は同一ではないのは明らかながらも「永代・御籤本」と比較し、その共通点、相違点を注解、挿絵と検討を行ってきたが、直接関係があると断言できるような事実は見いだせなかった。

他に「万年大雑書」という柱刻をもつ可能性のある本は、文化九年

刊「萬年大雜書永大曆」（加善）、文化二二年刊「萬年大雜書曆臺鑑」（作者濱本歌國、版元加賀屋善感）²⁸ある。題箋と柱刻が一致しないこともある。いずれにせよもっと刊本を確かめなければならぬ。

まとめ

最後に元三大師の御籤の解釈と用いられ方について、宗教家に範を仰いでみたい。

山田恵諦前天台座主は「小僧の時分からお大師さまのお籤に頼り、右すか左すべきかというときには決まってお御籤をいただいできた（中略）それで間違ったことは一度もない。やはり御利益である」と語る。²⁹

この宗教者の御籤観をみると、これまで考察してきたB・C群の御籤本だけではなく、「元三大師御鬮鈔大全」³⁰などの小型の抄本の御籤本の系統も刊行され続けている理由がわかる。これは、「失物」などの事象的判断以外の注解は、信仰の対象のみを示している本なのである。御籤を神仏のお告げであるとする本来の御籤の意味から言えば、むしろこちらが正統かもしれない。ただ、信仰があつてのお告げではなく、お告げの吉凶を好転させるための信仰を説くという点では、B群とかわりない。俗人相手ということで、誠めとして神仏に重きをおくか、儒教的倫理に重きを置くかと言うことの差であろうか。

また、「永代・御鬮鈔」で「かく気楽に日を送る工夫すべし」と語

るその達観は、先ほど引いた座主の御籤観に通じる。長生きの秘訣は「自然のまま無理をせず、何事も心配しない」事であると語り、それは「もたれかかる柱」つまり相談相手があればうまくいく、それが座主の場合は御籤なのである。一方その御籤の効用は「たとえ、そのとおりになくても、あきらめがつくこと」。御籤に頼っていると人に言っておけば、あれこれ言われたとしても「逃げ道に使える」ということである。とはいえ、「吉はほうっておいても吉」「凶のみくじが出たときがかえってみくじの大切さがある」というその御籤観に触れてみると、大吉であろうと凶であろうと、身の慎みを変わず訴える「百籤」の一種の息苦しい叙述の特徴が明らかになるのである。また「三世相」で自分の運勢を占うと「金持ちになれない」と出たが、「必要な金にはこまらない」という結果でもあったことから、金有り無しで目の前の事柄の必要不需要を知るといふようにつけとり、「こうした考えで暮らせば、気は楽になり、悩むことも少なくなり、生活に無理がかからなくな」と語っている。ここには、運勢占いで我が身の「分限」を知る人の安心がみてとれる。

大雑書は、「平安時代以降の陰陽道や宿曜道の系統をひき、八卦・方位・干支・納音・十二直・星宿・七曜などによる日の吉凶、さまざまな禁忌やまじない、男女の相性運などを内容とした書物である」³¹。言い換えれば、大雑書は人智では変えることのできない自身の運命や避けるべき事象や事柄を読み取り、それに則つて物事を行うという点で、「天命に従つ」方法である。それに対して、御籤本は、くじによ

り偶然を読み取り、もしかしたら可能かもしれない、天命を変えるうるわずかな可能性を探る手段になりえる。「百籤」ではそれを可能にするのは儒教の教えのもと、倫理的な処世訓で律した自分自身であり、それが時節を自分で見極められるようになるためにできる唯一の方法なのである。しかも、そうして得られる救いの糸は、人との、上の人との縁というわけである。しかし、人々はその可能性を信ずるだけのものをその倫理的な処世訓の中に見いだし得たのであろうか。

「永代・御鬮鈔」には御籤の解説として、「真に凶を転じて吉とし禍を避て吉にむかふの宝籤成れば心に少しの疑惑の念もなく一心に信心をこらしてとるべきものなり」と、大雑書に対しての「積極的な疑念の払拭」が勧められている。信じるべき対象はここでは自分ではなく、やはり信心である。恵諦座主の心境と併せて読むと、百籤の注解に見られる〈寄る辺なき〉が明らかに思われるように思われる。

注

- (1) 大野出著『江戸の占い』(平凡社刊、二〇〇四年)一九八頁
 (2) 問い紙は和紙ではなく、洋紙のようである。
 (3) 中村公一著『一番大吉―おみくじのフォークロア』大修館書店、一九九九年
 (4) 銘文に天竺靈感観音籤とある。前掲本(3)より確認
 (5) 二又淳「元三大師御籤本一覽稿」『近世文芸研究と評論 第六一号』近世文芸研究と評論の会刊、二〇〇一年
 (6) 注解、事象別判断、職分別判断、総括部分という言葉は、大野氏に

做った。

- (7) 「観音百籤占決諺解」は、近世文学書誌研究会編、影印本『近世文学資料類従・参考文献編十一』(勉誠社、一九七七年)を使用。
 (8) 大野出「元三大師御鬮鈔」考『日本語と日本文学』三二号、筑波大学国語国文学会刊、二〇〇一年
 (9) 大野出「元三大師御籤本の思想」『倫理学年報』第五〇号、日本倫理学会刊、二〇〇一年
 (10) 「観音籤」の信仰の対象としてあげられているのは、前掲(9)によると延二四九、それに対して、「百籤」では延五六。のちに比較対照していく「永代大雑書」では四二である。数の上ではさほど変わらないようだが、信心の対象が特定の神や仏ではなく「神仏」「信心」といったあいまいな表現になっている。
 (11) B群については適切な本にあたることができなかつた。
 (12) これ以後の「百籤」からの引用は、当用漢字、現代仮名遣いに適宜改めた。
 (13) 『宮本又次著作集 第八巻 大阪町人論』講談社、一九七七年
 (14) 前掲本(11)一四二頁
 (15) 東明雅校訂『日本永代蔵』巻五、岩波文庫、一九五六年、二六頁。以下「」内の引用はすべて同書から。
 (16) 「町人囊」中村幸彦校注『日本思想体系五九 近世町人思想』岩波書店、一九七五年
 (17) 前掲本 一四六頁
 (18) 前掲本 一四七頁
 (19) 「天保選書永代大雑書万曆大成」は、大阪府立図書館蔵本(浪華書林、天保十三年刊、明治十三年補刻)を使用。永代大雑書に収録されたのは、「元三大師御鬮鈔」だが、大雑書内の項目としては「元三大師御鬮鈔」となっている。
 (20) ここでは挿絵がないため「観音籤」は比較の対象としていない。
 (21) 前掲本(1)二二八頁

- (22) 川崎理恵「戦国時代の暦占」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』no.7 二〇〇八)によると、無期刊本ながら元和七年(一六二二)の墨書きを持つ大雑書が存在しているため、実際の出版は寛永八年より遡るとあるが、ここでは刊期の確定している寛永八年を採った。
- (23) その他の大雑書に収載されているかどうかについては、筆者の調査不足で調べることができなかった。
- (24) 『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』no.6 二〇〇七年
- (25) 橋本萬平・小池淳一編『寛政九年版大ざつしよ』岩田書院、一九九六年
- (26) 前掲本(25)所収、橋本萬平「『大ざつしよ』の系統と特色」一八二頁
- (27) 前掲書(25)一八四頁
- (28) 森田登代子「大雑書研究序説―『永代大雑書萬曆大成』の内容分析から―」『日本研究』vol.29、二〇〇四年
- (29) 山田恵諦「山田恵諦一〇〇を生きる―第二五三世天台座主自選著作集―」法蔵館、一九九五年。以下「」内の引用はすべて同書による。
- (30) 架蔵本による。
- (31) 横山俊夫「大雑書考―多神世界の媒介―」『人文会報第八六〇号』京都大学人文科学研究所刊、二〇〇二年

参考文献

- 大阪商業大学商業史博物館・佐古慶三教授収集文書「百籤」
 近世文学書誌研究会編、影印本『近世文学資料類従・参考文献編十一』勉誠社、一九七七年
 天保十三年、大阪府立図書館蔵本「天保選書永代大雑書万曆大成」浪華書

- 林天保十三年刊、明治十三年補刻
 近世文学書誌研究会編、影印本『近世文学資料類従・参考文献編十一』勉誠社、一九七七年
 大野出「江戸の占い」河出書房新社 二〇〇四年
 中村公一「一番大吉!―おみくじのフォークロア」大修館書店 一九九九年
 『宮本又次著作集 第八卷 大阪町人論』講談社、一九七七年
 東明雅校訂『日本永代蔵』岩波文庫、一九五六年
 中村幸彦校注『日本思想体系五九 近世町人思想』岩波書店、一九七五年
 大野出「元三大師御鬘諸鈔」考」『日本語と日本文学』三三二号、筑波大学
 国語国文学会刊、二〇〇一年
 大野出「元三大師御鬘本の思想」『倫理学年報』第五〇号、日本倫理学会刊、二〇〇一年
 川崎理恵「大雑書に関する書誌的考察―貞享から宝永期まで―」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』no.6 二〇〇七年
 川崎理恵「戦国時代の暦占」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』no.7 二〇〇八年
 橋本萬平・小池淳一編『寛政九年版大ざつしよ』岩田書院、一九九六年
 森田登代子「大雑書研究序説―『永代大雑書萬曆大成』の内容分析から―」『日本研究』vol.29、二〇〇四年
 山田恵諦「山田恵諦一〇〇を生きる―第二五三世天台座主自選著作集―」法蔵館、一九九五年